

派遣者番号	31K18	氏名	伊藤 久善
研究主題 —副主題—	「自宅学習」における自己評価能力の育成 —高等学校理科における実践を通して—		
派遣先	東京学芸大学 教職大学院	担当教官	宮内 卓也
所属	都立紅葉川高等学校	所属長	清水 薫

キーワード：自己評価 自己評価能力 メタ認知能力 自宅学習

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

今日の教育状況の中で、「自己評価の重要性」が着目されている。田中(2018)は、「自己評価とは、子どもたちが自分で自分の活動を点検・確認し、改善・調整していくこと」と定義し、「自己評価能力はメタ認知能力と言い換えることができる」としている。また、安彦(1997)は「自己評価は、個別自主学习を展開する上で必要不可欠なものである」と述べ、自己評価の習慣化を目指した自己評価能力を育てる具体的な授業を紹介している。卒業後、自身で学習を継続していくために、自己評価は、教員の助言なしでもできるようになる必要があるが、学校でその基盤を習得しておく必要がある。自己評価能力は、生徒が学校で学ぶべき最も重要な資質・能力であると言えるだろう。

以上のように、自己評価能力の育成についての研究はすでに重要視され、実践されてきている。だが、「自宅学習」のように教員の指導が届きにくく、生徒の学習する姿が捉えにくい範囲ではどうだろうか。高等学校の生徒面談では、よく「自宅学習の内容」について相談される。生徒は、自身の自宅での学習内容が果たしてこのままで良いのかということや、何をどのように学習したら良いのか分からないということについて悩んでおり、授業での活動よりも自宅学習の内容の助言をして欲しいと考えている生徒は少なくない。そこで、教員の指導が届きにくく、生徒の学習する姿が捉えにくい「自宅学習の内容」に焦点を当てた。本研究では、「自身の学習を点検・確認し、学習活動を改善・調整しながら学習を継続していく力」を自己評価能力と定義し、「自宅学習の内容」を点検・確認し、改善・調整しながら学習を継続していく活動において、生徒が自宅学習における自己評価能力を高めることができるかを検討する。

2 研究の内容・研究の方法

自己評価能力を育成する具体的な学習サイクルを構築し、それをもとに授業実践を行う。そして、授業実践の効果による生徒の自宅学習の内容の変容を質的に分析する。

(1) 授業実践の概要

授業実践は、1班3名の編成で、対面式の机(化学室の実験テーブル)で週1回、90分実施した。参加者5名全員、大学入試試験に向けて化学を学習している。本授業実践は放課後の時間を利用しており、毎授業までの自宅学習として「一問一答復習ノートの作成とそれを使用しての学習」と「プレゼンテーションの準備」を課題とした。最初の10分を「一問一答復習ノート」を班で共有して議論する時間、その後の30分を「プレゼンテーション」及び質疑応答の時間とした。毎週、参加者全員がプレゼンテーションを実施し、一人の発表時間を3分、質疑応答の時間を2分とした。残りの50分は新規で学習する内容を「講義形式の授業」で実施した。

(2) 講義形式の授業

授業者が作成した各単元の概要をまとめたプリントによる講義、教員からの問いに対する話し合い活動やその発表、化学実験等も含む。

(3) 一問一答復習ノート

講義形式の授業で学習した内容を、一問一答形式で整理するノート。重要語句が赤字で書かれており、それを赤シートで覆うことで、隠された部分を重点的に学ぶ学習法である。

(4) プレゼンテーション発表

講義形式の授業で学習した単元の範囲において、「疑問に感じたこと、もっと深く調べてみたいことを見だし、その解決に向けての経過と成果」について一人3分でプレゼンテーションを実施する。

3 研究の結果

(1) 学習サイクルの構築

バーンズ(1976)の四段階モデルをもとに、学習サイクルを構築した。

四段階モデル	生徒の活動	教員の活動
焦点化	授業 講義形式の授業で、新規内容の知識を学習する。	各単元の概要のみをまとめたプリントを用い、知識の定着を図る。
探索	授業 講義形式の授業で、新規内容について教員からの問いに対する話し合い活動及び化学実験を行う。	その単元の概念の本質に関わる問いを提示する。
再組織化	自宅学習 自宅学習として、一問一答復習ノートの作成及びそれを使用した学習、疑問に感じることもっと深く調べてみたいことを見だし、その解決に向けての過程を、プレゼンテーション資料として作成する。	自身が後で復習する際に、勉強しやすいものを目指し作成するよう指示する。そうすることで、定期的な自己評価を促す。
一般化	授業 ・自宅学習として作成した一問一答復習ノートをグループで共有し、議論を行う。 ・自宅学習として作成したプレゼンテーション資料を全体で発表し、それに伴う議論を行う。	議論が発展するよう促す。具体的には教員もできるだけ生徒と同じ視点に立ち、一生徒として議論に参加する。

(2) 事前事後アンケートを用いた自宅学習の内容の変容における質的分析

授業実践の事前と事後に「自宅学習で、普段やっている内容、大事にしていることを書いたアンケート」を参加者5名が記述した。参加者が記述した自宅学習の内容、大事にしている視点を整理したところ、以下の表のような視点が表れていた。

自宅学習の内容の学びの視点と人数 n = 5

自宅学習の内容、大事にしている視点	人数 (事前)	人数 (事後)
a 点検・確認の要素の大切さを捉えている視点	0	5
b 改善・調整の要素の大切さを捉えている視点	0	5
c 覚える(暗記)の視点	3	2
d 問題を解く視点	5	4
e 調べて理解することの視点	1	2
f 授業ノートや参考書を眺める視点	1	0
g 学習時間や計画の視点	1	0
h まったくしていない	2	0

※複数の視点にまたがる記述あり

4 研究の考察

今回の授業実践で実施した自宅学習の内容を点検・確認し、改善・調整しながら学習を継続していく活動は、生徒の主体的な自己評価を促し、自宅学習の内容の変容を確認することができた。また、その活動に伴う対話や深く学ぶ楽しさが、学習意欲の向上にも寄与する可能性があることが示唆された。

しかし、自己評価の「点検・確認」、「改善・調整」の要素については、アンケートの記述から確認することができたが、「継続」の要素について確認することはできなかった。学校における他の活動においても、生徒の自己評価を促す活動を繰り返し、習慣化させることが必要不可欠ではないかと考える。そうすることで、生涯、自身で学習を継続していくための自己評価能力が身に付くのではないだろうか。

また、本実践後も、生徒は自宅学習を主に問題を解く時間であると考えており、概念や本質を理解することを目指しても受験勉強にはつながらないと述べている。大学受験という目標が、問題を解くことで解決するのであれば、生徒の考えに変容は起こらないだろうし、この概念や本質的な理解を生徒に理解させ、それを活用できているかを問うことが求められるべきだろう。そのために教員は、限りある時間での「学校の授業」で学ぶ楽しさ、興味・関心から学習するきっかけを与え、「自宅学習」の時間に生徒が何を、どのように学ぶかについても深く考える必要がある。授業以外の時間に生徒がどのような学びをすることができるかを意識した授業設計が今、求められているのではないだろうか。

5 今後の展望

今回、在籍校の生物と物理の教員2名に「一問一答復習ノートの作成とそれを使用しての学習及び共有による議論」を同じ期間実施してもらった。本研究で実践した学習サイクルや同様の条件で実施したわけではないため、単純に比較することはできないが、協力頂いた教員へのインタビューからは、教員によるノートチェックの必要性の有無や、ノート共有時や議論の時間における教員の適切なアプローチについても検証が必要であることが確認できた。また、本活動が教員の授業改善における自己評価にも影響を及ぼす可能性があり、今後、検証の余地があると考えられる。